C'n

SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART

千葉市美術館名品展

光　あれば…

★

宮島　達男「地の天」1996

VOL.4

光 あれば… 江戸と現代の「とりあわせ展」

光

「光あれ！」と、神は天地創造にあたってまずこう叫ばれた。法華経の序品では、ブッダの眉間の白毫から発せられた光が一万八千の国土に充満するさまが述べられている。金や銀の輝きを用いた光明の表現、すなわち「荘厳」は、東西の宗教美術に共通している。

日本では金銀は世俗の世界をも荘厳する。金の雲形で囲まれた風景や都市の景観は、画中に住む人々の生活のありさまをも含めて、浄土さながらに美しく輝く。「**駿府城下行列図屏風**」（本館蔵）では、城下町を進行する大名行列の姿も、また通りの家並みも、金色に装われてさながら弥勒の世のありさまのようだ。

19世紀の印象主義の画家たちは、物体がもつ変化のない固有色を描くのでなく、大気に満ちた光を反射して移ろい変わる色を描きだそうとした。アトリエから外光の中へと、かれらの仕事の場所は移る。靄に囲まれた物体のシルエットを、黒い影としてでなく微妙な中間色の層としてあらわす、といった手法も、印象派は手掛けている。

こうした印象派につながる光の表現は、実は17、8世紀、江戸時代の南画にすでにあった。蕪村に学んだ呉春の「**漁樵問答図屏風**」（本館蔵）は、朝靄にけむる灌木を美しい銀灰色の調子であらわしている。明治のはじめ「光線画」と呼ばれた小林清親の風景版画（本館蔵）は、錦絵の伝統題材の中に外光や月の光、さらには文明開化のシンボルであるイルミネーションまでも取り入れて浮世絵の棹尾を飾った。また印象派の外光描写は黒田清輝らによって日本にもたらされ、屋外にイーゼルを立て名勝の風景のスケッチに余念のない洋画家の姿が増えた。かれらが好んで描いたのは陽光に満ちた房総の海岸風景である。多々羅義雄「**房州布良ヲ写ス**」（本館蔵）には、光を反射してまぶしいまでに明るい砂地がよくとらえられている。

現代になると光についての観念も扱い方もさらに多様になる。蛍光灯やハロゲンランプを用いた人工の光を点滅させるものとして、宮島達男「**地の天**」（本館蔵）は、現代の都市の夜景を飛行機から見下ろすような、あるいは夜空の星を眼下に見るような、幻想的な眺めを展開している。山崎博「HELIOGRAPHY」（本館蔵）の題名は「太陽による画」という意味だそうだが、長時間露出によって得られた海面の陽の光は、まるで金属板のように滑らかで静まり返っている。若林奮は現代の鉄板による前衛的造形を代表する作家だが、かれの「Sunrise, Sunset」（1976，本館蔵）は、果して題名とおり朝日と夕日を表現しているのか、それとも単に「屋根の上のバイオリン弾き」の主題にヒントを得たレトリックなのか、議論は分かれるだろう。

ところで千葉市美術館のコレクションは、江戸時代と現代美術という、二つの異質な分野を主な柱としている。他に類のない独特な構成だが、そのことにいったいどんな意義があるのか、問わなければならない。そこで私どもが考えたのが、「とりあわせ展」あるいは「つきまぜ展」とでも呼ばれるべき趣向である。あるひとつのトピックをつなぎとして、江戸時代と現代とが意外な対面をする、出会いの効果がたがいの作品に予想外の表情と魅了を与える。――こうしたねらいで、昨年試みた「流転する美」と「アナザーストーリー」は、私どもの予想を超え好評だった。それに力を得た今回の「光あれば…」では、いまあげたような作品たちが、「光」を仲人とした思いもかけない「お見合い」によって、生きるか死ぬか、はたして結果はいかに？――皆様方の遠慮ない御意見を期待します。

千葉市美術館　館長　辻　惟雄

無款《駿府城下行列図屏風》 元和～寛永期（1615～44）頃　紙本金地着色　六曲一双のうち左隻

千葉市美術館名品展　光あれば…

光の感覚

そもそも視覚とは、光が目の感覚細胞を刺激して生じる現象ということらしい。色も形もすべては光の刺激によって伝えられるものなのだが、私たちはそんなことを意識してモノを見ているわけではない。意識される「光」とは何であろう。私たちが「光」という場合は、ほとんどの意識が明るさに集中し、同時に美、希望、威光、真理など、何か抽象的だが崇高なイメージを伴わせていることも多いのは不思議なほどである。

思い浮かべていただきたいのは仏像や仏画、あるいは教会内のキリスト像やイコンなど、多くの場合に金が多用されて輝いていることだ。それは神仏の世界の威光を、金箔の照り返す光によって表そうとしたからにほかならない。

奈良東大寺の大仏様も最初は全身金が施されていたし、法隆寺の玉虫厨子も玉虫の羽に覆われて光り輝いていた。ここで金色も玉虫色も色ではなく光であり、光は何か非日常的な高みにある感覚を与えてくれるものとして認識されている。時代によって変容した部分ももちろんあるにせよ、人間の最も基本的な光への感覚を思いおこして一つの視点とするならば、古代から現代までの美術は、長い時間もただの事象にしかすぎず、本質的には同じ意識を共有するはずである。

江戸時代の金屏風などに見る金の使用、近代に明確になった光を描く試み、また発光体そのものを使った現代の美術など、時代も方法も違うけれど確かに光を表現している美術品を、同じ部屋に呼び寄せてしまったらどうだろう。どんな光に対する感覚が呼び覚まされてくるであろうか。

今回の展覧会には、光を含んだ表現の認められる江戸時代から現代の作品が集う。この美術館に収蔵されなければ出会うことのなかった作品たち、展覧会において感覚的な「光」などというテーマを与えられることにもおそらく無縁であった江戸時代の絵画類も多く出品される。しかし何時の時代の作品だとしても光の表現は作家の感覚によって計算されているのだから、それを見てみるのも面白いことになりはしないだろうか。

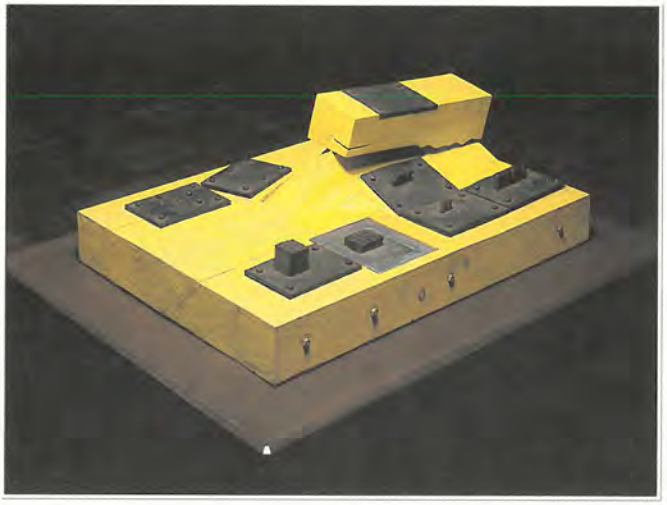
この展覧会では、情報を得るために作品を見ることをしばしやめて、見て感じるということに集中していただければと考えている。会場にはあまり言葉を使わず、そのかわり好きな時に眺められるような冊子に表現を感じるための視点を提案することになるだろう。多くの方はよく展覧会で作品を見るよりもまず先にキャプションに書かれた作者名と題名、時代、作品の制作背景などの文字情報を読んでおられる。そして作品は単にその情報を確認するためのものになってしまうのか、あっという間に通過して次のキャプションに移られる方もいる。

実際、言葉や文字にあふれた世の中に生活する現代人は、それ以外の表現から何かを感じ、満足感を得ることがかえって難しいのかもしれない。しかし美術の歴史や材質への興味など、様々な作品へのアプローチがあるとしても、美術館は基本的には見て感じる場所でありたいと願っており、それでこそ美術品の持つ本来の力をもっともよくわかっていただけるように思う。

（学芸員　田辺昌子）

「千葉市美術館名品展　光 あれば…」
［会　期］平成10年1月10日（土）～2月15日（日）
［休館日］毎週月曜日
［料　金］一般200円（160円）／大・高生150円（120円）
／小・中生100円（80円）
※（　）内は30名以上の団体料金。千葉市内の小・中学生は、第2、第4土曜日無料。

広島　新太郎《夕暮小景》
大正五（一九一六）年頃
木版、紙



若林　斎《Sunrise, Sunset》
昭和五十一（一九七六）年
木、鉄、鉛、ガッシュ

魅力溢れる展示を作る

千葉市美術館の常設展示

美術館には目下の催しものを訊ねる電話が多くかかってくる。

問い合わせ：「今、何をやってるんですか」
美　術　館：「常設展示です」
問い合わせ：「何だ、何もやってないんですか」
美　術　館：「いいえ、常設展示です。当美術館のコレクションをご覧になれます」
問い合わせ：「だから、何もやってないんでしょう？」
美　術　館：「・・・」

私は知っている。「常設展示」とは、大抵の皆さんにとって何もやってないも同様なのだ。論より証拠、どこの美術館でも常設展示の期間になると入場者数はぐっと落ち込む。ルーヴルや大英博物館はさておき、ここのようなふつうの美術館では「折角来たのに常設しかやってなかった」場合を除いて、わざわざ常設を見に来る人は本当に少ない。考えてみれば「常設展示を見に行く」なんて言ったって、ステキな作品に出会えるに間違いない「シャガール展」や「マーク・ロスコ展」に行くのと比べて確かに全く心のときめきがない。それに常設展示は大抵の場合、町にステキなポスターも貼られてなければ、ちらしも置いてないではないか。そんな予算も許されないのが常設展示なのだ。しかし、時折××市立美術館×億円で美術品購入なんて揶揄混じりでマスコミを賑わすその作品は原則的にそこの常設展でしかお目にかかれないし、当館など高額作品はなくとも高質作品の数々は自負するものがある。なのに一体何が常設展示をつまらないものにしているんだ。

そこで常設展示とは、どの様に構成されてきたのか、今一度考える必要がある。最も一般的なスタイルは、コレクションのカテゴリー毎、当館の例に沿って言えば「房総ゆかりの美術」「近世近代の美術」「現代美術」のそれぞれから数十点ずつを選び、各々のゾーンを設けて基本的に古い順、あるいは流派グループ別に作品を並べるやり方。その全体に一定のテーマを設け、相応しい作品を選ぶことも多い。例えばその季節らしい作品を選んで「秋の造形」と言うように。コレクションの方針が多義的な美術館では分野を一つに絞り込むこともある。今回の常設では「近代絵画」だけを取り上げる、と言った具合。また「鉄」「木」「紙」と言った素材を断面にすることもある。いずれの場合も展示構成の尺度となるものは主に時間軸や美術史的に設定された分類であって、基本的には同傾向の作品があるゾーンに集うことになる。

でも考えてみれば、そのような尺度は知識として美術を整理しようとする際に便利であっても、展示の方法論、つまり純粋に作品と私たちの関係を計る物差しとして最良のものだろうか。美術は死んだ標本ではない。無機的な単一のスケールに従って作品を並べようと言う方に無理があるのではないか。そこには美術を、それが本来そうであったように、人間の為したる業として扱う視点に欠けている。そして、この点にこそ常設展示のアピールのなさの原因が露呈しているのではないだろうか。では、どうしたらいい。ここぞ美術館員たるもの一番の腕の見せ所。

目下、模索中ではあるが、ここに私たち千葉市美術館常設展示チームの試みがある。まず我々は単調に陥りがちな既述の展示方法は止めた。そのかわり同じエリアに集う作品が相互に特徴を引き立て合うように、その関係性を今一度よーく考えることから始めた。作品が自ら語らんとしていることは何だ。時代を隔てていても主張は同じこともある。その同時代ならではの表現もある…

対照と相乗効果を使い分け、個々の作品の魅力を引き立ててみよう。そして鑑賞者の注意力を集中させる。結果として、200年以上も時代を隔てた江戸時代の古典と、制作されて10年も経たない現代の抽象絵画が平然と並ぶこともある。我々の考えが的を得ていれば奇異に映らぬ筈だ。そのためには自分の専門分野なんてケチなことを言ってないで、総てのコレクションの特性をよーく理解していないとならない。支離滅裂なだけの展示を作らぬ

池玉瀾《蘭図》江戸時代／野村仁《コスミック センシビリティ Ancient Edged Tool》1992年

ようにするさじ加減は、我々の腕前一つによる。いくら理屈が立派な学芸員でも、作品を熟視する本質的なセンスに欠ければだめだ。それこそこの職業に必要な本当の資質かもしれない。

最初の試み、97年初夏に開催した「流転する美」は、次の様な構成になった。最初の展示室入り口の正面には小山穂太郎の「空間ー空よりNo.2」(1989)、電線が絡み合う町の空の風景写真に漂白やスクラッチ処理を施した作品だが、誰の目にも見慣れた日本の風景の懐かしさを呼び起こす。続く山田正亮の2点の絵画(1965)は、銀色にペイントされた正方形の画面にそれぞれ藍色と茜色のラインが縦横に横切っている。実に思わせぶりな現代の絵画が続いた後で、徐に登場するのは狩野山雪の「雪中騎驢図」(江戸時代)。しかもこの味わい深い墨絵を荒川修作の1960年前後の代表作2点が取りまく贅沢な展示(左下写真)。同じ空間には恩地孝四郎の版画「白堊」(昭和初期)、宮島達男のドローイング「地の天」(現代)、円山応挙「秋月雪峡図」(江戸時代)などどちらかというと画面に余白が多く残された白っぽいコンセプチュアルな作品が並ぶ。後から言うのは簡単だが、敢えて総括するなら日本美術の本質にもせまるいわば「空」のイメージを意識した部屋だ。続く部屋には打って変わってサイケデリックな色彩を氾濫させた。それ自体色彩の化け物のようなテーブルセットのオブジェ、草間弥生「最後の晩餐」(現代)をめぐり、周囲の壁を月岡芳年「風俗三十二相」(明治時代)、篠原有司男「海岸で読書する日本髪の女」(現代)、菊川英山「花魁図」(江戸時代)など原色を効かせた作品が比較的狭い空間に押し込められている。部屋に入った途端目がくらむような空間になった。言ってみればサイケな色彩のトンネル。更に次の部屋では、桑山忠明の1970年代のメタリックな作品3点が鈴木其一の銀箔、銀泥を使った屏風「芒図」を取り囲む。同じ部屋の向かい側の壁では池玉瀾「蘭図」と野村仁の隕石を作品と化した作品「コスミック・センシビリティ」が同じガラスケースの中に収まっている(4ページの写真)。前の部屋とはまた異なった実に爽やかな空間だ。展示経路の締め括りとなる1室は河原温の日付だけが記されたデート・ペインティング7枚「ワン・ウィーク」と伊年印の「許由巣父図」(対幅)が作るモノクロームのシンプルな空間(右下写真)。お分かり頂けるだろうか。ただ古典と現代美術を隣り合わせたのではない。時には同作家の同時期の作品を集約させた小さな空間を形成し、また時にはある一つの作品をフィーチャーして中心性を持たせ、それを取り囲む数点の作品によってバランスをとる。その際に作品のカテゴリーに囚われるのをやめようということだ。私たちでさえ、ある作家の回顧展なんかに行って同じ人の作品がほんの少しづつ変遷しながらも延々並んでいると途中で飽きてしまう。ましてや確固たる目的があって来る人など殆どいないだろう常設展示では、編年体(時代順による)の展示では来館者が直ぐに集中力を欠いてしまうだろうことは想像に難くない。だからこそ刺激の種類を変えながら来館者の感覚を揺さぶる工夫が必要だ。でもそれは、そもそも作品との関係を取り持つための方法の一つであって、いつでもどんな作品展示にとっても有効な万能の方法とは思わない。ある1点の小さな作品が、か細いが無限の光を放っている時には、その作品のために他の総てを展示室から持ち出し、真っ白な壁にそのひとつを据えなければならない場合だってあるかも知れない。そんな場合にはそれが、見に来た人と美術との最適な、いや唯一のあり得る関係だ。

「流転する美」は各方面から随分お褒めを頂き、まんまと成功した。時代も技法も違う作品同士が互いの存在を認めあい、個々の作品の特徴をクローズアップさせたことを多くの来館者やマスコミが認めてくれたのだ。時代の隔たりとは意外と鑑賞の支障にはならないものだ、ということを感じた。かくして、千葉市美術館の魅力溢れる展示作りは続けられる。

さて、今度の常設展示は「光　あれば…」なるかっこいいテーマ。展示する側にとっては実にやっかいなこの主題の下で、やはり江戸時代初期から同時代の作品までが同じ空間で隣り合う。古典と現代美術は、一般に想像されているほど不仲なものではない。いやむしろ、時代は遥かに隔てども同じ目的の下にある彼らは相互に畏敬し合っている。浮世絵ファンも現代美術フリークも想像以上の刺激を楽しめること間違いない。

(学芸員　半田滋男)

所蔵作品展「流転する美」展示風景(平成9年5月9日～6月22日)

誌上ショッピング

宅配便でお届けします！

■アートなTシャツ

美術館所蔵の作品がTシャツになりました。図柄は熱帯魚好きには見逃せない吉田博の「ホノルル水族館」とちょっとアナーキーな立石紘一の「ハン」で、価格は2,000円サイズはMとLがあります。

立石紘一〈ハン〉（右）
吉田　博〈ホノルル水族館〉（左）

■見逃した方、図録で鑑賞！

千葉市美術館では、これまで開催された企画展の図録を販売しております。友の会の方は定価の1割引です。

千葉市美術館所蔵作品選…1,800円／喜多川歌麿展（2冊組）…3,000円／Tranquility（6冊セット）…4,100円（単冊700円）／大英博物館所蔵肉筆浮世絵名品展…2,200円／祝福された四季近世日本絵画の諸相…2,500円／桑山忠明プロジェクト'96…2,800円／アメリカン・モダンの旗手たち…2,800円／珠玉の日本美術展…2,500円／戦後美術の断面…2,200円／超克するかたち（2冊組）…2,800円／フォルクヴァング美術館展…2,200円／チベット密教美術展（2冊組）…2,800円／日本の版画Ⅰ・1900－1910・版のかたち百相…2,500円／江戸の摺物…2,500円／アメリカン・ストーリー…2,000円

【お申込は】

ご希望の商品名（TシャツはサイズM or L）をお書き添えの上代金を現金書留で美術館までお送りください。ミュージアムショップより品物を宅配便でお送りさせていただきます。配送料は着払いとなります。
また上記の商品は、直接1階のミュージアムショップにお越しいただいてもお求めになれます。

企画展図録

「友の会」ご入会の案内

企画展・常設展の入場はフリー、図書の割引などの特典がございます。是非ご利用くださいませ。

〈入会金〉

一般会員…… 1,000円
学生会員（高・専・大）…… 500円
ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族）…… 2,000円

〈年会費〉

一般会員…… 3,000円
学生会員（高・専・大）…… 1,500円
ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族）…… 6,000円

【入会のお申込み】

●美術館受付けに備えてある「入会申込み書」を利用し、お申し込みください。
●休館日（臨時を含む）や年末年始は、お申し込みできません。
※詳細は、千葉市美術館（TEL 043－221－2311）までお問い合わせください。

市民ギャラリーご利用の案内

9階の市民ギャラリーは、市内で活動する美術団体の方々に作品を発表していただくスペースです。

市民ギャラリーは1・2・3の三室に分かれ、それぞれが絵画をはじめとして、彫刻や工芸、写真など多様な展示に対応しています。また、三室を合わせ、ひとつの大きな空間として利用することが出来ます。

[利用時間] 10：00～18：00（金曜日のみ20：00まで）
[休館日] 月曜日及び年末年始

※詳しくは美術館までお問い合わせください。

ミュージアムグッズのニューフェース紹介

今年は虎だ！ 蕭白だ！

今年の干支、虎の絵をあしらったグリーティングカードができました。今年春の特別展「曾我蕭白展」（3月24日～5月5日）で出品される虎の図（P7参照）が表紙です。1Fミュージアムショップにてお求めください。

展覧会スケジュール

［休　館　日］月曜日（祝日の場合はその翌日）　年末年始　展示替期間中
［開 館 時 間］午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）
［ハローダイヤル］043-227-8600

千葉市美術館名品展「光 あれば…」（収蔵作品展）

1月10日（土）～2月15日（日）

テーマは「光」。素材や描写などによって作品のなかにもたらされた光は、どのような感覚を私達に与えるのでしょうか。時代を超えて、様々な形で光を含んだ作品を、新たな視点と取合せで展観します。

主な作品は、宮島達男「地の天」（1996年）、無款「駿府城下行列図」（江戸時代）、呉春「漁樵問答図」（江戸時代）、関主税「刻」（1990年）など。

第29回　千葉市民美術展

2月21日（土）～3月13日（金）

千葉市民からつのった美術作品による展覧会。日本画、洋画、書、工芸、彫刻、写真、グラフィック・デザインの七部門から構成され、合計約千点による意欲作がしのぎをけずります。年一度の、市民による美術の祭典です。

菅木志雄展

5月12日（火）～6月14日（日）

菅木志雄は戦後の日本を象徴する美術の動向「もの派」の中核となる作家として海外からもその活動が注目されている。初の回顧展として開催。全国4館巡回展の最後として、他館で展示されなかった作品を中心に構成します。

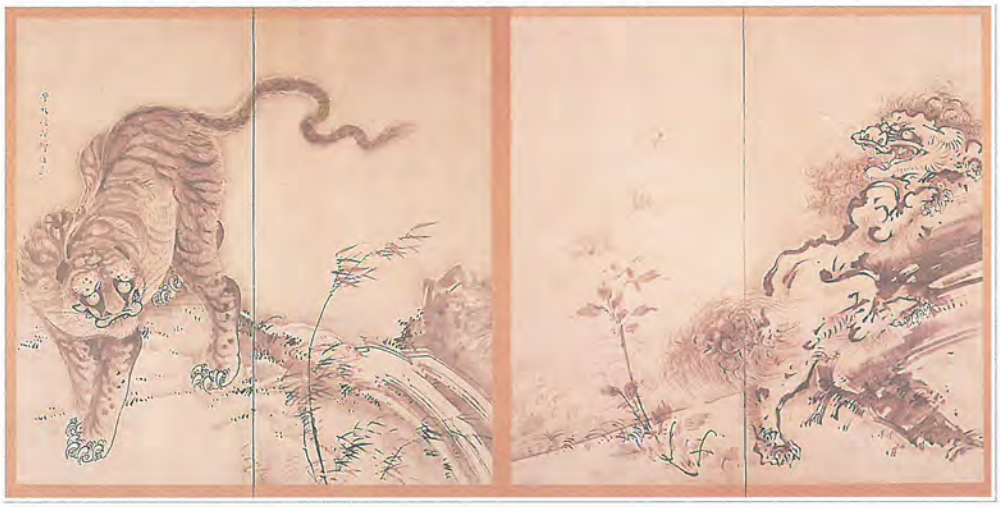
曾我蕭白展

3月24日（火）～5月5日（火・祝）

奇想の画家として知られ、18世紀の京都画壇を代表する異才として近年ますます評価の高い曾我蕭白（享保15・1730年～安永10・1781年）。その生涯にわたる画業を、在米作品の里帰りを含めて回顧する展覧会を開催します。

過去、2、30年で調査が進み、代表作や各地漫遊のあとを裏付ける作品が確認されていますが、それまで蕭白といえば、国内ではほとんど顧みられず、むしろ国外での評価の方が高い時代が続きました。とくに、明治時代に来日したフェノロサやビゲローが、多くの作品を米国に持ち出したことをきっかけに、ボストン美術館に約50点が収蔵されて、蕭白研究には欠くことのできないコレクションを成しています。本展では、このボストン美術館所蔵の「商山四皓図」「楼閣山水図」をはじめ、米国内5ヶ所のコレクションから、名品約15点が一挙に里帰り展示されます。国内の代表的大作、新出の作品も含め計約80点で、奔放で雄渾な蕭白芸術を紹介する、決定版の回顧展です。

曾我蕭白《獅子虎図》宝暦期（1751～64）頃　紙本墨画　二曲一双　各154.3×156.6cm



■展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合せください。

美術館の所蔵作品より

石井　林響　〈万年平和図〉　大正13（1924）年　絹本着色一幅　67.0×80.6cm

石井林響（1884～1930）は、現在の千葉市である千葉県山武郡土気本郷町に生まれました。本名、毅三郎。千葉中学校在学中、図画教師だった洋画家・堀江正章にその才を認められ洋画を志しますが、のちに日本画への転向を決意し、橋本雅邦に入門します。明治期には歴史画を主に描いていましたが、大正期に入ると色鮮やかな中国風俗や南画、そして水蒸気豊かな朦朧体風の田園風景を多く描くようになりました。

現在見ると伝統的な絵画と思われがちな林響のそれらの作品は、当時としては新しい意味を持っていました。すなわち、彼が描く田園風景とは、都市化が進むなかに住む絵画愛好家たちにとっては身のまわりに失われつつあるように感じられた日本の風土（現在と比較すればとんでもないほどに豊かではあったのですが）そのものであり、中国風俗は、江戸時代に日本で描かれていたそれとは異なり、近代における「旅行者としての日本人」の視点がより強く打ち出されるようになっているのです。

この作品にもまた、当時の時代が色濃く影を落としています。

1910年代の後半に起こった第1次世界大戦（1914～18）の終結以後、1920年代のはじめには人類が体験したかつてない戦争の悲惨さから、あらためて各国で「平和」が語られるようになります。しかし日本では22年に東京・上野公園で「平和記念東京博覧会」が開かれたものの、戦争がヨーロッパを中心に行われていたために好景気による経済利益を受け、その実感は乏しいものでした。その幻想は林響が本作品を制作した前年に関東を襲った大震災のために打ち砕かれ、ひとびとは震災を「天罰」と受け止め、繁栄に酔った自分たちを反省するようになります。

静穏な田園風景を好んだ林響が描いたひとつがいの鳩は、豊かな自然のなかに抱かれたひとびとが人間らしく生き、末永く落ち着いた暮らしができるようにとの画家の祈りが込められているのです。

林響が本作品を制作した2年後、日本は激動の昭和時代を迎えます。1926年のことでした。

（学芸員　藁科英也）

美術館ご利用あんない

1-2階　SAYA-DO HALL　さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物（ネオ・ルネサンス様式）を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階　MUSEUM SHOP　ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7階　AV CORNER　映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

10階　ART LIBRARY　図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

[開室時間] 10:00～18:00

11階　RESTAURANT　レストラン かぼちゃワイン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

[営業時間] 11:00～18:00

●JR東日本千葉駅利用

東口より徒歩15分　京成バス大学病院行（のりば⑦）「大和橋」下車徒歩2分　京成バス矢作台市営住宅・川戸行（のりば⑦）または小湊バス八幡宿駅行（のりば④）「広小路」下車徒歩1分　無料巡回シャトルバス・チーバス（のりば⑲）「中央区役所・美術館前」下車11：00～18：00の毎時05分と35分に発車（水曜日運休）

●京成電鉄千葉中央駅利用

東口より徒歩約10分

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

〒260 千葉県千葉市中央区中央3-10-8　発行日:1998年1月1日
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
[ご案内]NTTハローダイヤル 043-227-8600
Publication: 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba city, Chiba pref. Japan zip.260-0013
制作・印刷：㈱翠松堂